

金成マツ筆録 アイヌ叙事詩

女性叙事詩

小鳥の耳飾り（1）

Menoko Yukar
Chirpo Ninkari

高橋靖以 訳

北海道教育委員会

小鳥の耳飾り（１）

Chirpo Ninkari

目次

例言	1
原テキスト	1
原テキスト第1ページ（影印と翻刻）	1
表題	2
編集要綱	2
分担	2
参考文献	3
物語 小鳥の耳飾り	5
第1章 ノヤサラの姉妹	5
1.1 育ての兄の養育	5
1.2 ノヤサラの過去	6
1.3 交易	7
1.4 ウバユリ掘り	7
1.5 姉の乱心	8
第2章 イヨチの姉弟	9
2.1 姉の養育	9
2.2 夢見	9
2.3 救出	10
2.4 蘇生	11
第3章 イヨチにて	12
3.1 目覚め	12
3.2 イヨチ人の怒り	13
3.3 ノヤサラのその後	14
第4章 酒宴	16
4.1 酒宴の招待	16
4.2 イヨチ人の病氣	16
4.3 シヌタブカの神居	17
4.4 親族との会見	17
4.5 シヌタブカ人との出会い	18
4.6 イヨチへの帰還	20
4.7 失恋	21

小鳥の耳飾り	23
第1章 ノヤサラの姉妹	23
1.1 育ての兄の養育	23
1.2 ノヤサラの過去	31
1.3 交易	37
1.4 ウバユリ掘り	38
1.5 姉の乱心	41
第2章 イヨチの姉弟	46
2.1 姉の養育	46
2.2 夢見	48
2.3 救出	54
2.4 蘇生	59
第3章 イヨチにて	63
3.1 目覚め	63
3.2 イヨチ人の怒り	69
3.3 ノヤサラのその後	77
第4章 酒宴	84
4.1 酒宴の招待	84
4.2 イヨチ人の病氣	87
4.3 シヌタブカの神居	90
4.4 親族との会見	92
4.5 シヌタブカ人との出会い	100
4.6 イヨチへの帰還	108
4.7 失恋	113

例言

1. 原テキスト

1 chirpo ninkari chirpo tamasai
 Iresu yubi shisak chiresu
 kamui chiresu Iyekarkar
 wa ramma kane katkoro
 kane okai an Ikoshikup
 mat pon Akor Sapo turanno
 luko reshba an shino naa
 nokan an wa Iresu yubi
 Ireshba boka eramu hebeyarne
 aine tane ne kusu semorboro
 no okai an inkaranko ine
 ap kusu aun chise oshke he
 ne soike hene pirika wa
 atomte wa shiran nankora
 tamboro chise upsoro kamui
 korobe eshik taban iyoikir
 rambesh kunne chishi tu-
 rire ikittukari chituye
 Amset kani amset chi-
 shiturire kurkashike kamui
 Imeru eshimaka Amset
 kurka Iresu yubi ehorari
 kane keshto anko shirika
 nuye kebushbe nuye kokip

1 chirpo ninkari chirpo tamasai

Iresu yubi shisak chiresu
 kamui chiresu Iyekarkar
 wa ramma kane katkoro
 kane okai an Ikoshikup
 mat pon Akor Sapo turanno
 luko reshba an shino naa
 nokan an wa Iresu yubi
 Ireshba boka eramu hebeyarne
 aine tane ne kusu semorboro
 no okai an inkaranko ine
 ap kusu aun chise oshke he
 ne soike hene pirika wa
 atomte wa shiran nankora
 tamboro chise upsoro kamui
 korobe eshik taban iyoikir
 rambesh kunne chishi tu-
 rire ikittukari chituye
 Amset kani amset chi-
 shiturire kurkashike kamui
 Imeru eshimaka Amset
 kurka Iresu yubi ehorari
 kane keshto anko shirika
 nuye kebushbe nuye kokip

原テキスト「小鳥の耳飾り」の第1ページ（影印と翻刻）。H. I-46.

本書に収録されているアイヌ語テキスト（「小鳥の耳飾り」）は、金成マツ（1875-1961）によって記された叙事詩のテキストである。このテキストが収録されている手帳は、萱野志朗氏（萱野茂二風谷アイヌ資料館）によって所蔵されている。2020年8月17日に訳者は萱野茂二風谷アイヌ資料館にて、遺稿の閲覧・写真撮影をおこなった。翻訳・編集は、この写真（影印）を用いておこなった。撮影にあたって、萱野志朗氏、北海道アイヌ協会のご協力をえた。

ここに紹介する「小鳥の耳飾り」は手帳の1ページから221ページに記されたものである。この2021年度の報告書では、1ページから109ページまでを紹介する。

このテキストが収録されている手帳のINDEX欄には以下の記載がある（アイヌ語表題は金成マツ、日本語訳は金田一京助による）。

- 1 chirpo ninkari chirpo tamasai
- 2 Pon Akor Sapo resui anta Aetoibu kar
- I. 小鳥の耳環, 小鳥の佩玉
- II. 若き我が姉三度土倉に造られる物語

2. 表題

物語の表題は次のように書かれている。

chirpo ninkari chirpo tamasai

この報告書では次のような表題とした。

アイヌ語表題 Chirpo Ninkari

日本語表題 小鳥の耳飾り

また、金成マツは本テキストのジャンルについては記載していない。しかしながら、物語の内容から判断すると、本テキストはMenoko Yukar「女性叙事詩」というジャンルに属するものとみられる。参照の便を考慮して、表題にMenoko Yukarと「女性叙事詩」という語句を加えた。

3. 編集要綱

原テキストの最初のページを複写してp.1左に掲げた（影印）。この部分を忠実に再現すると、p.1右のようになる（翻刻）。本書では原テキストを以下の要領で編集し、対訳をおこなった。

- (a) 叙事詩の詩句を再現することを意図し、1行が4音節ないし5音節に収まるように改行をおこなった。しかしながら、例外も多く、6音節以上になることがある。また、詩句の再現が困難であり、恣意的にならざるをえなかった場合がある。
- (b) 固有名詞については大文字を使用した。そのほかの大文字はすべて小文字に置き換えた。
- (c) 語の切れ目に従い、原テキストの分かち書きを変更した。また、原テキストにおいて、改行により分断されて表記されている語は、もとの形を再現して示した。
- (d) 2行の詩句にまたがる動詞については、1行目の末尾にハイフンを補った。
- (e) 人称接辞と人称語幹の境界にハイフンを挿入した。
- (f) 各行（詩句）に通し番号をつけた。また、手帳のページ番号も示した。
- (g) 物語の内容に従い全体を4つの章に分け、各章をいくつかの節に分けた。また、それぞれの章、節に見出しを付けた。
- (h) 原テキストはローマ字表記であるが、片仮名によるアイヌ語表記を新たに加えた。
- (i) 各行にアイヌ語の逐語訳を加えた。逐語訳は極めて便宜的な性格のものである。アイヌ語の文法を理解した上で利用されたい。紙面の制約により、たとえば繫辞類を繫、理由・目的の接続詞を根拠、形式名詞を形名、などと省略して記した。
- (j) 脚注は最少限にとどめた。
- (k) 「物語 小鳥の耳飾り」を本文の前に加えた。欄外の数字は該当する叙事詩の行番号を示すものである。

4. 分担

編集にあたっての分担を示す。

- (a) 原テキストの解説・翻訳（数字は「小鳥の耳飾り」の行番号）

高橋靖以 II. 1-4922

(b) 片仮名アイヌ語表記

高橋靖以・切替英雄・山下浩一

(c) 逐語訳

高橋靖以 II. 1-4922

(d) 物語 小鳥の耳飾り

高橋靖以 II. 1-4922

(e) レイアウト・組版

高橋靖以・切替英雄・山下浩一

5. 参考文献

テキストの翻訳にあたって参考にした文献を以下に示す。

- (a) 金成まつ（筆録）・金田一京助（訳注）『アイヌ叙事詩ユーカラ集』I-VII. 三省堂. 1959-1966 年.
- (b) 金田一京助『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』II. 東洋文庫. 1931 年.
- (c) 久保寺逸彦『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店. 1977 年.
- (d) 田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』草風館. 1996 年.
- (e) 服部四郎（編）『アイヌ語方言辞典』岩波書店. 1964 年.
- (f) ジョン・バチラー『アイヌ・英・和辞典（第4版）』岩波書店. 1938 年.

物語 小鳥の耳飾り

第1章 ノヤサラの姉妹

1.1 育ての兄の養育

- 1 育ての兄がまたとない養育、神の如き養育を私にほどこして、いつも変わりなく私たちは暮らしていた。ともに育った女、年少の姉とともに育てられた。まだまだ私たちは幼く、育ての兄は私たちを育てることに悩み苦しんだ。今や、私たちは少し成長した。
- 19 見れば、なんとまあ、私たちの家は、家の中も家の外も、美しく飾られていることか。大きな家の中には、神宝が詰まっている。宝物の列は低い崖のように伸びている。宝物の列の手前に仕切られた寝台、金の寝台が伸びている。その表面は神々しく光っている。寝台の上には育ての兄が座っている。兄は毎日、宝器の彫刻、刀鞘の彫刻に余念がない。
- 47 育ての兄は、毎日、私たち二人に物事を教えた。「女というものは、ここまで成長したら、煮炊き、掃除、針仕事、編み物、編み袋作りなど、何であれ、女がすること、女の仕事はこのようであるのだ」と兄は言い、私たちに教えた。しかし、私は一番幼い者であったから、教えられたことも何とも思いはしなかった。
- 72 毎日、灰の中で灰まみれになって、上座へ、下座へと灰を散らして一人で遊んでいた、ともに育った女、年少の姉は先に生まれた者であるから、今は育ての兄が言った通りに、炊事でも、掃除でも、針仕事でも上手にできるようになった。
- 88 いかなる生まれの者、いかなる育ちの者が作ったものであろうか、上座の高い衣桁と低い衣桁は、神々しい刺繍衣、金の刺繍衣でしなやかに曲がっている。その表面はいくつもの神々しい光、たくさんの神々しい光で輝いている。私はそれを好ましく思った。
- 104 宝列の端から金の女侍の宝箱が連なり、宝列の下の方はきらびやかである。それが下座の隅まで連なっている。その手前には、金の枕が置かれている。金の床はなめらかに伸びている。金の炉縁木が伸びている様子はル

マイベの色である。夜も昼も、私の住まいの中が飾られている様子、美しい有様を私はとても嬉しく思った。

育ての兄の金の小袖には、袖口にも裾にも、幅広の平金に取り付けられており、それを普段着として身にまとっている。留め金のついた帯を胴に回し、神授の太刀を帯に差している。金の小さな兜をかぶり、兜の紐を締めている。兜の端で神々しい顔が陽光のように明るく輝く。勇者であるらしく、勇者の容貌で表情が異彩を放っている。私はそれを嬉しく思った。

ともに育った女、年少の姉も、どこの村に、どこの国土に、並び立つ容姿の者、並び立つ容貌の者がいるであろうか。美しく育てられた者、立派に育てられた者であり、金の刺繍衣、神々しい刺繍衣を普段着として身にまとっている。首飾りや耳飾りをつけており、神のごとき様子である。私はそれを嬉しく思った。

年少の姉は絹を取り出して私のそばに置いた。「さあ早く、妹よ、刺繍をしなさい」と言われたので、私は喜んで針仕事をした。大きな袋、小さな袋を私は縮めて、笑いながら振り上げた。育ての兄と、ともに育った女、年少の姉に見せると、二人とも鼻と口を手で押さえ、上手だと褒めた。本当のことであると私は思い、私は後ろへ振り向いて笑みを浮かべた。

また、袋作りに夢中になっていると、何か様子がおかしいと思った。そこで様子を見てみると、よもやまた、そうするとは思わなかったのに、育ての兄と年少の姉は、私が作ったもの見て、後ろへ振り向いてひそかに笑い、忍び笑いをしている。私はそれを見ただけではあるが、悔しい気持ちになった。私はあおむけに倒れて、足を振り回したり、足で踏みつけたりした。私の泣き声が響き渡った。

すると、兄と姉は大いに慌てたものであるから、目を大きく見開いた。育ての兄は頭をかいた。そして、言うことはこのようであった。

「これは驚いた。我の年少の妹は何を泣いているのか。可愛想なことだ。外にいる使用人、中にいる使用人が何

126

151

172

199

226

238

かを言う声がするので、うっかり、そのことを我が笑ったのだ。我の年少の妹はこのように上手であるのだから、どうして我が笑うことがあろうか。まったく、我が笑う訳がない。」

260 兄はこのように言った。年少の姉も、同じように、聞いたことのない数々の良い言葉で私に教諭した。そうすると、私はそれを信じて立ち上がり、涙の合間から目を開けた。再び精を出して私は袋作りをして、毎日暮らしていた。

277 年少の姉は何と器用であることか。刺繍したものは幾重もの神雲となって立ち昇る。私はまことに感心した。育ての兄は息の中心、心臓の中心に私を結びつけるように、首の根元も無くなるかのように、私を可愛がっていた。

294 幾つもの若さを競い合わせるように、私は成長した。今は少しばかり成長した。あまりにも私は不器用で、成長する間に育ての兄、年少の姉が私を笑い嘲っていた針仕事も、今は何でもできるようになった。私はまことに心の中で喜んだ。私が作ったものは、幾重もの神雲となって立ち昇る。その表面は数多の神光で輝いている。自ら作ったものではあるが、私は嬉しく思った。

326 育ての兄と年少の姉は手を高くかざし、低くかざして、私が作ったものの表面を見回した。あたりまえに感心するものであるならばさもあるが、まばたきをしながら、まことに感心した様子である。育ての兄は口元に笑みを浮かべ、このように言った。

345 「素晴らしい。年少の妹は昔から器用であったが、今はまことに上手である」と言うので、悔しい気持ちになった。息をすることも、呼吸することも、自ら塞ぐようにして後ろへ向くと、私は笑いをこらえた。

362 育ての兄はあるときから、小鳥の耳飾り、小鳥の首飾りを取り出して、私を飾り付けた。金の小袖、その小袖の表面は金の小鳥の形象で飾られていた。袖口にも裾にも、幅広の平金が取り付けられている。小袖の表面は神光で輝いている。

379 重ねて畳まれている小袖を、兄は私の上へ広げ、私に着せた。絹の帯が巻かれ、神々しい鉢巻きが巻かれた。鉢巻きの表面には金の小鳥の形象が連なって飾り付けられている。鉢巻きの表面は白い靄と赤い靄が立ち込めている。私はそれを好ましく思った。

398 このような神の装束を私は着せられた。以前からも、とても人間の美貌にとどまるのではなく、自分でも美

しいように思っていたが、さらに、このような神の装束を私は身にまとったのだ。そうであるから、なお一層、とても、人間の姿ではないようである。たちこめる靄、その靄の中に私は身を入れていた。私の周囲には神光が明るく輝いている。

育ての兄も、年少の姉も、良い心で私の方へ顔を上げようとする、如何なる神、如何なる貴人を目撃したのでろうか。私の手前へ視線を落としている。

1.2 ノヤサラの過去

その間に、幼少の頃から、長者の噂、婦人の噂が神の噂として広がる様子はこのようであった。遠くにあるトミサンベチ、シヌタブカにカムイオトプシ、神の如き勇者がおり、弟と妹と、年少の妹の四人で暮らしている。男たちは、その容貌、その勇気には、神々のところにも、人間のところにも、敵う者がいない。同じように、女たちも、その容貌、その器用さには、国土の上に匹敵する者がいない。そのような噂を私は聞いていた。

その間にまた、遠くにいるイヨチ人は、姉に育てられ、同じように数々の噂が国土を越えて、神の噂として広がっていることを私は聞きながらいた。ある日、育ての兄は囲炉裏の上座に出てきて、火のそばに座った。

驚いたことに、育ての兄を私は近くで見たが、人間の姿であろうか。まことに神の姿である。何か言いたそうにしており、火箸をつかんで沖にある灰を岸へ寄せ、岸にある灰を沖へ押しやっている。そして、灰を突いたり、筋を付けたりした。兄は喉を響かせてこのように言った。

「さてさて、我が妹たちよ、今こそは言い伝えを話すから、よく聞きなさい。我らの村の名前はノヤサラであり、昔、ノヤサラ人、我らの父は兄弟がおらず、妹が一人いた。トミサンベチ、シヌタブカの神の如き勇者にも兄弟がおらず、妹が一人いた。同じように、イヨチ人にも兄弟がおらず、妹が一人いた。

トミサンベチ、シヌタブカの神の如き勇者は、あまりにも雄弁であり、美貌であり、勇敢であった。いつも噂が広がっていた。そこで、遠くにいる者たち、近くにいる者たちが神の如き勇者を一斉に妬み、敵対した。そこで、成長するにつれて、神の如き勇者は戦いばかり、戦闘ばかりに巻き込まれた。

イヨチ人は妹とともに、同じ戦い、同じ戦闘をおこ

424

435

466

485

508

534

555

なった。神の如き勇者たちの戦いがノヤサラの村にまで広がったときに、我らの父は年少の頃から先祖の言葉、残された言葉を守っていた。まことに立派な心を持ち、神の掟、貴人の掟で村を治めていたので、理由の正しくないこと、理不尽なことに加担することはできなかった。

580 そこで、戦いを嫌がり、戦闘を嫌がって、同じ戦い、同じ戦闘で労苦を分かち合った。戦いが静まったときに、戦いの挨拶、戦闘の挨拶をするために、我らの叔母は神宝で首の上を飾って、トミサンベチ、シヌタブカに嫁いだ。

599 トミサンベチからは、神の如き婦人が嫁いで来た。この装束も、おまえがそれで育てられた神宝も、トミサンベチシヌタブカの高みで、天空から、神々のところから降ろされたものである。それで首の上を飾って、ノヤサラ村に嫁いだ。それから、我ら三人が生まれたのだ。

617 イヨチの女もトミサンベチに嫁入りし、カムイオトブシとその妹が生まれた。ノヤサラの女、我らの叔母からは神である弟とその妹が生まれたのだ。トミサンベチの城の上手の女がイヨチ村へ嫁ぎ、それから、一人の女の子と一人の男の子が生まれたのだ。

637 その次に、我らの親たちは、若いときに、あまりにも戦いばかり、戦闘ばかりに辛酸を舐めた。そこで、一人残らず疲れてしまった。落ち着いて人間の村で暮らしていくことが出来ず、「神々の村に行つてまことの結婚、本当の結婚をしよう」と言いながら、一斉に神の世界へ立ち去ってしまったのだ。そのときに残された言葉はこのようであった。

663 「ノヤサラの女、年少の姪を年少の我が子に与えて、我らの亡くなった後を繁栄させなさい。他の甥たち、姪たちは親族の繋がりであり、上手くいくように結婚するのがまことに良いことである」と、シヌタブカの神である叔父たちは夫婦で遺言を残したのだ。

683 そこで、トミサンベチ、シヌタブカの年少の弟、神の如き勇者の、シヌタブカの襦袢の上で、その襦袢の上でおまえは育てられたのだ。そこで、決して犬のように痩せて筋張った者を見たとしても、笑みを浮かべたり話したりしてはいけない。

703 婦人というものは、言い付けを聞くものである。残された言葉、先祖の言葉を、よく心の中に留めて、婦人の振る舞い、立派な心を持ちなさい。」

715 兄はこのように言い伝えを話した。そのように言われ

て、親愛の気持ちを私は抱いた。親族を欠く者、親類を欠く者が私であると思っていた。如何なる他人、如何なる余所者の噂が立つとしても、私は大いに親しみを覚え、感心したことであろうが、今はまさに、私の親族の話であったのだ。私はまことに嬉しく思った。如何なる者が夫であるのか。並大抵ではない勇者である夫とともに、私は育てられたのだと、心の中で喜んでいた。

1.3 交易

育ての兄は山へ行くと、数多の獲物を仕留めた。脂身ばかり、良い肉ばかりで私たちは良い食事をしながら、いつも暮らしていたが、あるときに、育ての兄はこのように言った。 747

「さてさて、我の妹たちよ、話すからよく聞きなさい。 759
昔、我らの親たちは、驚いたことに、和人のところへ交易に行き、酒や穀物や美味しい物、何であれ良い物ばかりを、沢山舟に載せて運んでいたのだ。我もここまで成長したので、交易に行くことができる。そこで、交易に行くつもりだ。

神の住まいも、おまえたちのことも心配であり、我の片方の足は沖にあるかのように、もう片方の足は陸にあるかのようなのである。しばらくの間、交易に行つて、まことに良い土産を手に入れて、早く戻ってくるつもりだ。仲良くして、神の住まいを守りなさい。お互いに身を守りなさい。」 780

兄はこのように、良い言葉を幾度も私たちに言い聞かせ、舟の中へ熊の毛皮、鹿の毛皮を沢山運んだ。二人の男の子を舟に乗せ、沖へ出ていった。 800

その後で、私はとても寂しくなった。何ということか。 810
毎日、育ての兄とともに暮らしていたので、心強く思っていたのだが、突然、二人だけになった有様を見て、まことに心の中で寂しく思った。すぐに育ての兄を思い出し、早く時が流れてくれれば良いのにと考えた。

1.4 ウバユリ掘り

年少の姉は、普段よりもさらに笑顔を見せた。尻を地面に付けることなく、炊事をするために跳ね回り、笑い声、話し声を響かせた。そうではあるが、どうしたことであろうか。私は腕の力も萎えてしまい、笑うことも話すことも気乗りしなかった。その翌日、ともに育った女、年少の姉はこのように言った。 837

853 「さてさて、私の妹よ、神の如き者よ、話すからよく聞
きなさい。どうして急につまらなそうにして、寂しがっ
ているのか。何ということか。育ての兄とともに暮らし
ていると、いつも歓談をしていたのだが。育ての兄がし
ばらくいないからといって、このように寂しがるとは。さあさあ、我慢しなさい。しばらくの間だけです。

876 今日まことに天気が良い。そこで、ウバユリ掘りに
行きましょう。このようにつまらない気分のときに、家
の中にばかりいると良くないのです。山に行って、山の中
を見て回ると、とても楽しくなります。さあ山へ行きま
しょう。おまえがウバユリ掘りをしなくても、私が一人
でウバユリ掘りをするのを見ているだけでも構わないで
すから、一緒にいきましょう。」

900 こう言われて、良い言葉として私は聞いたが、激しい
風のように、その言葉は私の耳をかすめた。まったく、
そのような話には気が進まなかった。少しも、年少の姉
とともにいきたいとは思わなかった。私は座っていると、
年少の姉は跳ね起きた。身支度をして背負い袋を取
り出し、荷物をこしらえて、このように言った。

919 「育ての兄が和人のところへ交易に行き帰ってきた
ときに、再びウバユリの混ぜ物料理を沢山用意したら、
なおのこと、育ての兄は喜ぶことでしょう。」そのよう
に言って、荷物を背負い、私の手をつかんで、私を引っ
張った。私たちは外へ出た。

932 良い天気であった。山へ向かう道、獣の踏み跡は黒々
としている。姉は道の上を跳ねて行き、その背中を私は
追いかけた。年少の姉は何度も振り返った。笑い声、話
す声が木原の間で響いた。息をすることも、呼吸するこ
とも、私は自ら塞いだ。

951 遙か山奥へ行くと、大きな沼があった。沼の上手は霞
み、沼の下手は霞んでいる。沼の水面は明るく輝いてい
る。沼の岸の木原の上には、何とウバユリが群生してい
ることか。ウバユリの群落が広がっている。それを見
て、私たちはウバユリ掘りをした。大きな穴を作り、ウ
バユリの茎を落とした。

1.5 姉の乱心

973 大きな荷物を私はこしらえて、立ち上がろうとして、
荷縄を解いた(?)。それと同時に、全く予期せぬこと
に、いきなり、私の悪い姉が、よもやまた、そのように
するとは思わなかったのに、私の髪を手で握じった。勢

いよく地面の上へ私を叩きつける音が響いた。

姉は私の上へ尻を乗せ、私を強く掴んだ。振り向くこ
とも、頭を向けることも私はできない。姉は悪い性分を
顔に表した。罵りの言葉を私に投げつけることはこのよ
うであった。

「さてさて、私の悪い妹、尻の切れた奴、話すからよ
く聞きなさい。私こそが美貌であり、器用であり、立派
な婦人なのである。私は先に生まれた者であるのに、如
何なる理由か、私には夫が与えられることもない。悪い
妹、尻の切れた奴め。おまえ一人だけが女であり、美貌
であるというのか。神宝も独り占めして、それで育てら
れている。

如何なる生まれの者、如何なる育ちの者がトミサンベ
チ、シヌタブカの年少の兄であるのか。ともに育てら
れ、一人で良い思いをするということなので、私はそれ
を聞いてから、まことに羨ましかった。そこで、おまえ
を妬んだ。夜も昼も、この場所で、沼の神におまえのこ
とを祈っていたのだ。

だから、何もウバユリが欲しくて、ここにおまえを
誘ったのではない。おまえを良いようにしてやろうと思
い、おまえを騙してここへ連れてきて、おまえを殺して、
沼の尊い神の腕の中に放り込んでやろうと思ったのだ。
分かったか。」

姉はこのように言い、懐の刀の鞘を払った。私に斬り
かかってきた。私の小袖は切り裂かれた。神々しい耳飾
りも、神々しい首飾りも、神々しい鉢巻きも身体から外
れた。肌着のみとなった。私は見たり聞いたりしただけ
ではあるが、どうすることもできなかった。ひどく驚
き慌てたものであるから、「姉さんよ」と私は泣き叫ん
だ。私の泣き声が響き渡った。そして、私はこのように
言った。

「これはこれは、ともに育った女、年少の姉よ、話すか
らよく聞きなさい。神宝で私が育てられたことも、夫と
ともに育てられたことも、すべて私がしたこと、私の意
志でしたことではないのだ。遺言がその通りであったか
ら、そのように、育ての兄が私に教えたのだ。だから、
私もそのように思って、今まで暮らしていたのだ。

驚いたことに、あなたは私を可愛がるかのように振る
舞っていたので、まことの心、良い心を持っているのだ
とばかり、私は思っていたが、まさかそのように思っ
ていたとは、少しも気付かなかったのだ。私は少しもあ
なたを悪く思っていない。少しもあなたを妬んだりもし

991

1003

1027

1046

1062

1091

1113

ていないのだ。だから、私がそれで育てられた神宝を、あなたが欲しいと言うのなら、すべてあなたに渡すつもりだ。

1139 トミサンペチ、シヌタブカの年少の兄も、夫にしたいというのなら、あなたに渡すつもりだ。さあ、年少の姉よ、落ち着いてくれないか。私は何も持たずとも、生きていて、怪我をすることもなく、この国土で、育ての兄と年少の姉を見ながら暮らしたら、それ以上の望みは無いのだ。

1162 どうか年少の姉よ、私を憐れに思って、命だけは助かるようにしてください。私たちは同じ先祖を持つ者、同じ下紐を持つ者であるから、決して私を痛めつけることはしないでほしい。」

1174 私はこのように言うと、肌着を身にまとい、しがみついた。年少の姉の腕の上、腕の下から私は逃げ回った。そうすると、年少の姉は憤怒と狂気に憑りつかれ、私を深く突き、深く斬り裂いた。私を浅く突き、浅く斬り裂いた。

1190 何ということか、何としたことか。今は痛みというもの私には知った。私の身体はどこもかしこも、樺の皮が焼かれて縮んでいるかのように痛い。どのようにすることもできない。悲鳴を上げ、叫び声を上げながら、私は泣き声を響かせた。こちらへと、あちらへと、姉は私を激しく叩き、激しく踏みつけた。どのようにすればよいのか、私には分からなかった。眠ったのか死んだのか分からなくなった。ここで、話は他のところへ移る。

第2章 イヨチの姉弟

2.1 姉の養育

1218 年少の姉がまたとない養育、神の如き養育を私に施して、いつも変わりなく私は暮らしていた。大きな家の中は神宝で飾られている。宝物の列は低い崖のように伸びている。その上に、長者の佩刀の幾重もの紐が下がっている。その垂れた房が揺れている。その上は神光で輝いている。

1242 宝物の列の手前に、金の仕切られた寝台が伸びている。その上で私は育てられた。金の床はなめらかに広がり、金の炬縁木が伸びる様子はルマイベの色である。どこもかしこにも私は感嘆した。私の住まいが美しく飾られている様子には私は感心した。

年少の姉はどこの村に、どこの国土に、匹敵する容姿の者、匹敵する容貌の者がいるだろうか。神の如き様子で、美しい姿である。姉は息の中心、心臓の中心に私を結びつけるようにして私を可愛がっていた。私もまさしく美しい様子であり、たちこめた靄、その靄の中に身を入れていた。

年少の姉は毎日、刺繍に集中していた。刺繍をすると、出来上がったものは幾重もの神雲となって立ち昇る。私はそれを嬉しく思った。

今は少しばかり大きくなり、私は自らの身体を眺めた。毎日、宝器の彫刻、刀鞘の彫刻を私は習い覚え、今ほどでも上手になった。神々の形象を幾重にも私は連ねた。自ら作ったものではあるが、まことに美しい有様に私は嬉しくなった。

年少の姉は、このような神、このような貴人が自らを差し置いて、如何なる神、如何なる貴人を目撃したというのか。良い心で私の方へ顔を上げようとしたが、私の手前へ視線を落としている。私たちは暮らしており、夜になると、宝物の光、宝器の光が日光のように家の中で輝いた。私はそれを好ましく思った。

2.2 夢見

ある日、どうして私はそのように思ったのか、昼間から、つまらない気持ちになった。大いに夕食をとり、食事が片付いた。しつらえられた寝床、その寝床の上に私は身体を伸ばした。私が横になるとすぐに、年少の姉はよく眠ったものであるから、寝息をたてていると、その間に、私は眠ることもできない。浜手の方へ、山手の方へ、何度も寝返りを打った。

そうしていると、明け方が近づいてきた。よもや眠ることになるとは思わなかったのに、突然、私は穏やかな眠りに包まれた。私は眠っていたが、目を大きく見開いた。私は神窓へ目をやり、編み目の隙間から外を見た。見ると、立てかけられた幣柵、その幣柵の上から靄の橋が伸びている。

私の村の川、その川に沿ってどこまでも、靄の橋が伸びる様子は明るく輝いている。その上に私は目をやり、どこまでも見ていると、靄の橋は伸びて行って、他の方向から来た川、その川の奥に曲がっている。私が見ていると、何の村か、山の奥の方に大きな沼がある。沼の上手と下手は霞んでいる。沼の岸にはウバユリの群落がど

こまでも広がっている。

1406 すると、どうしたことであろうか。ウバユリの群落の上手にも真中にも、あたり一面、争いの跡が残されている。泥だらけになっている。ウバユリの群落の上は血にまみれているかのようなのである。おびただしい血が、沢のように、流れ下っているかのようなのである。私は怖ろしい気持ちになった。

1425 木原の上に小さな靄の山があり、あちらへと、こちらへと、手で地面を叩いている。泣く声が響いているのかと思ったときに、笑いながら手を打つ音がした。さらに、話す声はこのようであった。

1439 「如何なることか。育ての兄が悪い妹がいない様子を見たならば、このように、惜しむことであろう。しかし、悪い妹を私は惨殺して、沼の神、尊い神の腕の中に投げ込んだ。そこで、人間の村では、私のしたことを誰一人として知らないのだから、今や恐れることは何一つ無い。これから、あのように私が思っていたことを、まことに私が望んでいたことを、まきしくかなえることができる。まことに嬉しいことだ。これもすべて、沼の神、尊い神が私を憐れみ、私を見守ってくれたからなのだ。悪い妹、尻の切れた奴、婦人であり、美貌である者を私の手で惨殺することができたのだ。」

1483 そのように言いながら、まことに心の中から、心の底から喜んでいる。そこで、靄の中を私は目で散らして見たところ、驚いたことに、女の悪人、女の末裔であるのだろうか。大切に育てられた者、立派に育てられた者であるらしく、隅々にまで私は感心した。ウバユリを掘るために山に入ったものであるから、山仕事の姿である。そうではあるが、どのように称賛することもできないほど美しい。

1507 何か、大きな包みを腋の下に抱えている。その上に神光が輝いている。私が見ると、驚いたことに、金の小袖であり、その小袖の表面は金の小鳥、神の小鳥の幾重もの形象で飾られている。袖口と裾には幅広の平金を取り付けられている。絹の帯とともに畳まれており、小鳥の耳飾り、小鳥の首飾りと金の鉢巻き、神々しい鉢巻きがある。その表面も、小鳥の神の幾重もの形象で飾られており、それが縛り付けられている。

1540 女は大きな包みを抱えて、木原の上にわざと身を投げるようにして、偽りの涙を流している。その台間に飛び跳ねて、笑いを堪えていたが、ずっと跳ねて行き、浜手へ下っていった。

沼の縁に血の靄の小山があり、その上に悲しみの影が幾重にも重なっている。靄の中心を何度も私は目で散らした。

二度見ても、三度見ても、人間の姿を見定めることができなかった。酷い血の靄、その靄の中によもやまた、そのようなものを見とは思わなかったが、若い娘がいる。今年あたりに、遊びの胸紐を高く結んだ者である。肌着だけの姿で伸びている者である。まさに、酷く殺された様子であるらしく、肌着も引き裂かれており、深く斬り裂かれ、浅く斬り裂かれている。

何ということか、何としたことか。成長した娘、一人前の女の隠すべきところが露わになっている。長い間泣いていた者であり、遺体が伸びている。悪い女が「結構なこと」と言ったが、何がそうであるのか。若い娘は遺体ではあるが、とても人間の美貌を持つものではない。まことに神の如き姿であり、美しい。

まことに、憐れみの心を私は抱いた。心の底から、若い娘を憐れに思った。あまりに可哀想で、気分が悪くなるように思った。そこで目が覚めた。夢を見ていたのだ。私は驚きの気持ちを抱いた。まことに不思議に思った。

2.3 救出

年少の姉はいつものように熟睡していた。今はまことに夜明けとなったので、こっそりと、寝床の上で私は起き上がり、身支度をした。私は煙り出しの窓から抜け出した。私の村の川、その川に沿って、穏やかな風、その風の先に私は軽々と持ち上げられた。

夢の中で、あのように見た通りに、山奥の一帯は明るく輝いている。他の方向から来る川、その川の中へ私は入って行った。如何なる山奥か、山奥の先の方に大きな沼があった。

夢であるのか、眠りであるのかと思っていたが、まさしく、あのように私が見た通りである。沼の縁に、あのように、私が称賛した若い娘の痛めつけられた身体が伸びている。私は驚きの気持ちを抱いた。

その間に、沼の真中が持ち上がった。見ると、よもやまた、そのようなものを見とは思わなかったが、何者であろうか。まことに、丸木舟の胴が付いているような者であり、目は丸い月のように並んでいる。上顎と下顎が交叉しているかのようなのである。口は大きく開かれ、

齒は人喰い槍のように突き立っている。私は怖ろしく思った。

- 1702 沼の神が若い娘に向かって上陸してくると、身体の先端で波が分かれた。すると、遅れてはならないと私は思い、急いで駆けつけた。若い娘は痛めつけられ、斬り裂かれ、斬り刻まれていた。血の塊になっている肌着を私は剥ぎ取って丸め、その上陸しつつある性悪の神の大きく開いた口、その口の中に投げ入れた。そして、罵りの言葉を浴びせることはこのようであった。
- 1729 「さてさて、おまえは沼の神と呼ばれているのだ。私はただの人間であり、戦いの理由、争いの理由は少しも知らないのだ。おまえは別の神、別の貴人であろうが、何故、人間の女を理由なく、奪い取ろうとするのか。待て待て、まだ少し待ちなさい。
- 1752 もう暫くしたら、この女たちがどこの村の者、どこの国土の者であって、おまえの沼の傍らにやって来て殺し合いをしたのか、それが分かるのだから、よく聞きなさい。私はこの女に先に出会った。だから、私は思い通りにするつもりだ。少し不思議に思う。」
- 1775 私がこのように言うと、沼の神はその肌着を呑み込んで、沼の方へ引き返し、沼の真中へ去って行った。そこで、私は帯を解き、肌着として着ていた小袖を脱いで、若い娘の裸の身体に巻き付けた。
- 1791 私は天空へ飛び上がった。川に沿って吹く風を私は引き連れ、速い神風、その神風の先に軽々と持ち上げられた。私が下る音が鳴り響いた。外にある櫓、その櫓の上には私は降ろされた。館の傍らで、私の跳ねる音が鳴り響いた、私の鐙の鳴る音が響いた。玄関の納屋の中へ私は入り、垂れ下がった簾戸を肩の上に跳ね上げた。土間の上に、光とともに、靄とともに、私は押し入った。
- 1818 見ると、年少の姉は今ようやく起きて、窓を下ろした。それから火を燃やすために、何度も身を屈めた。物音がするのを不思議に思い、土間の上で私を目にすると、当たり前前に私を見るものであるならばさもあるが、私を見て目を丸くした。姉は鼻を押さえ、口を押さえ、驚きの声をあげた。
- 1838 「これはまた、私の弟君は、ここで静かに寝ているのだと思ったので、恐れ多いから、静かに仕事をしていたのに。このように、まだ暗いうちから、遠いところから戻ってきたかのような様子をしている。如何なる眠りを私はしたのか。昨晩はまことによく眠ったので、夜が明けたのも気付かなかった。」

姉はこのように言った。私は喉を響かせて次のように言った。あのような次第で、眠ることが出来ず、少し眠ると、あのような夢を見た。まことに驚いた。そこで、行って見たところ、まさしく、あのような様子であったことを私は詳しく話した。 1861

2.4 蘇生

それから、死んだ若い娘を年少の姉の腕の中に放り投げた。私がそうすると、姉は大いに慌て、弱いイムと激しいイムを繰り返し、奥へ退いた。姉は若い娘の身体を見回して、危急の叫び声を上げた。そして、言うことはこのようであった。 1881

「どうしたのか。驚いた、このような娘を見ることになるとは。村は数多であるが、どこにこのような者がいることであろうか。しかし、何が戦いの理由、争いの理由であるのか。可哀想に。成長した娘、一人前の女が妬まれて殺される様子は、尋常ではないことだ。弟君がなおのこと、先に出会うことは、このような様子であることか。 1900

この娘は余所者ではないのだ。このように、ノヤサラの女、私の妹が妬まれたことを私はよく分かっている。早く早く、弟君よ、今までの私たちの親族は、神に願い、神に祈ることができる人々なのだ。神に祈りなさい。私たちは少しも間違った振る舞いをしていないが、このような重大な出来事に弟君がぶつかって、私たちの住まいの中に、死んだ貴人がおり、神の傍らに入れられてしまっている。どのように畏まるからとて、どうにかして蘇生させてから、あちこちへ知らせよう。 1928

暫くの間だけでも、早く蘇生させなければ、次第に悪くなるように思われる。早く、互いに力を合わせて蘇生させよう。」 1966

年少の姉はそうに言い、私を励まししながら、若い娘を右座に横たえた。傷口を吹いて癒すために、姉は飛び跳ねて、葉の入った小鍋を囲炉裏の上に掛けた。宝物の列から金の唐櫃を私は引っ張り出し、六重の箱を縛る紐を解いて、上蓋を払い落した。 1979

最も底にある箱の中から私が取り出したものは、驚いたことに、家の中で明るく輝いた。見ると、金と銀で作られた魂を呼び戻す刀、夫婦の神を私は取り出したのだった。若い娘を私は身体の上に乗せ、両側の胸の上に魂を呼び戻す刀を置いた。 1998

- 2018 それから、私がおこなう談判が郭公の声のように響いた。若々しい喉で、私は声を響かせた。何とまあ、私は頭が良く、雄弁であることか。私の言葉は私の心の中で、私の口のところで、次々と出てくるかのようなのである。私は神々の出自を幾度となく解き明かし、神に願い、神に祈った。
- 2039 年少の姉は、歌の節で喉を美しく振じった。その口は帰天する神のように鳴り響いた。何とまあ、喉が良いことか。心の中で、私は感心した。
- 2051 それから、二人で治癒を懸命におこなった。年少の姉は、若い娘の胸の上で、かすかな魔払いの息吹きを繰り返した。神の計らいで、若い娘の胸の上で、少しずつ動悸がするようになった。次第に、神々しい顔に血の気が戻り、赤くなってきた。
- 2069 それと同時に、瞼の上も足の指の上も、反りかえるようになり、私の片方の顔のところで娘は目を開けた。何を見たのか、驚きの声を娘は発し、背を向けて、強張った身体を横たえた。それからまた再び、二人で懸命に治癒をして、蘇生させた。娘は命を取り戻した。
- 2089 驚きの声を上げながら、泣く声が響き渡り、娘は左座の隅の方へ這っていった。そして、隅に隠れ、泣く声が響いた。
- 2101 年少の姉は同情して、泣きながら若い娘を慰めた。良い言葉を何度も言い聞かせながら、神々しい刺繍衣も、絹の帯も、神々しい耳飾りも、神々しい首飾りも、神々しい鉢巻きも、その傍らに置いた。食べる物も沢山、年少の姉は煮炊きして、大きな高盛りの飯を娘の傍らに置いたが、一口も食わずに、昼も夜も泣く声が響いた。ここで、話は他のところへ移る。

第3章 イヨチにて

3.1 目覚め

- 2129 死んだのか、眠ったのか。長い間であるのか、短い間であるのか。私は意識が無く、いつしか、何かの声、何かの物音がして、その合間に何度も目覚めようとする、何度も夢を見た。
- 2144 今、聞いていると、驚いたことに、如何なる生まれの者、如何なる育ちの者の喉の声であろうか。男の喉、若々しい喉であり、その談判は郭公の声のように響き、神に祈っている。何とまあ、喉が良く、雄弁であること

か。聞いていると、私についての祈りであることが分かった。

それと同じく、女の喉、若々しい喉が響き、何者かの歌の節が帰天する神のように響いた。その合間に、私の小さな胸は、かすかな魔払いの息を吹きつけられていた。それと同じく、治癒をする風によって、私は心臓の上手から心臓の下手まで、伸び伸びした気持ちになり、目を覚ました。何者かの片側の顔のところで私は目を覚ました。

驚いたことに、育ての兄ばかりを私は立派な男として見ており、その容貌を遠く探し求めていたが、それに匹敵する者、それを凌ぐ者であるだろうか。まだ年若い少年がまさしく、疲れ果てるまで神に頼み、神に祈るものであるから、汗を浮かべている。私はそれを見て、大いに慌てたものであるから、驚きの叫び声を上げた。それからまた、どうしたのか訳が分からなくなった。

それからまた、私は目覚めると、再び、私についての祈りがされていた。今は、まことに命を取り戻した。良い薬を飲まされると、その薬効を幾度となく、私は飲み込んだ。まことに元気になった。私は驚きの声を上げながら、左座の隅、その隅に隠れて泣いた。

私は自らの身体を調べてみると、どこに傷を負ったのだろうか。昔の肉付きが戻っており、爪の傷さえも残っていない様子である。例の裂かれた肌着は無く、肌の上には、男の小袖、神々しい小袖、袖口にも裾にも、幅広の平金が取り付けられているものを私は着ている。

私はそれを見ただけではあるが、悔しい気持ちを抱いた。私にはどうすることも出来なかった。驚いたことに、悪い姉、尻の切れた奴は、赤の他人がしたことでも忌々しいのに、同じ家で手助けを私にしていたのだ。如何なるものが夫であるのか。夫を持つために、まさしく、死にそうな思いをした。如何なる生まれの者、如何なる育ちの者がトミサンベチ、シヌタブカの年少の兄であるのか。私は妬まれて、悪い姉に私は謝った。

姉は結婚したくて、嫉妬して、私を妬み、私を憎んだ。「まったく私は結婚したくない、すべて姉に譲り渡すから、命だけは助かるようにしてくれ」と、あのように、泣きながら頼み込んだのに。それに加えて、尋常ではないことを私にした。

私は一人前の女、成長した娘であるのに、祖母の肌も、先祖の肌も汚され、殺されるにしても、並大抵ではなく痛めつけられたのだ。少しのくだらぬことさえ、私には

2165

2186

2213

2233

2256

2286

2305

出来ないのに、神であろうか、人間であろうか。私を蘇生させて、一緒になって、毎日私は治癒されていた。今は生きているのだから、これからどのようにすればよいのか。

2330 私の装束も、すべて悪い姉が奪い取ってしまった。育ての兄は交易から戻ってきたのだろうか。戻ってきたら、どのように、悪い姉は酷い嘘をつくだろうか。私はこのように思った。様々なことを次々に思い出していくと、まさしく、悪い姉が憎らしく、息をすることも出来ないような気がした。

2353 「如何なる振る舞いをしようとも、どうにかして、これから私の村に帰ったら、少しばかりの返礼をしてやろう」と心の中で気合いを入れ、自らを奮い立たせた。悲しみの涙を幾度となく私は流した。

2371 その間に、若い娘がいるのだろうか。私は悪い姉のことを美しいと言っていたのだが、何であったのだろうか。若い娘は今年あたりに、悪い姉と同じくらいに成長したように思われる者である。美しく育てられた者、立派に育てられた者であるらしく、金の刺繍衣、神々しい刺繍衣を普段着として身にまとっている。耳飾りや首飾りを付けている。神々しい鉢巻きで髪を高く上げている。神々しい髪は絹の糸のように頭上を覆っている。髪の前は光っている。その下に、神々しい顔が日光のように明るく輝いている。

2409 神の如き姿である者は、私が泣くと同情して、良い言葉を何度となく、私に言い聞かせた。囲炉裏の側へ出てくるように、私に言いながら、神々しい刺繍衣、金の刺繍衣、絹の帯、神々しい鉢巻きなどを私の側へ置いた。女は煮炊きを懸命におこなった。良い食べ物の高盛りを私に差し出したが、まさしく、私は遠慮するものであるから、一口も食べずに、夜も昼も泣いていた。その間、神の如き者たちも何も食べずにいた。

3.2 イヨチ人の怒り

2442 見ると、宝物の列の手前に、仕切られた寝台、金の寝台が伸びている。寝台の上に神の如き者がおり、たちこめる靄、その靄の中に身体を入れている。自らの陰で、私は靄を払って見ると、年若い少年であり、金の小袖、袖口にも裾にも幅広の平金に取り付けられているものを、普段着として身にまとっている。留め金の付いた帯を胴に巻き、神授の刀を帯に差している。金の小さな兜、そ

の兜の紐を強く締めている。兜の下で、神々しい顔が明るく輝いている。勇者であるらしく、勇者の容貌で顔色が異彩を放っている。

毎日、宝器の彫刻、刀鞘の彫刻に集中している様子である。よもやまた、そのように言うとは思わなかったが、突然、宝物の列の手前にある寝台の上で、勇者は起き上がった。怒りの言葉、罵りの言葉を私を突くかのよう、私を斬るかのよう、その言葉が美しく響くことはこのようであった。

「なんと汚らわしく、忌々しいことか。貧乏な女、貧しい女、どの村の者、どこの国土の者であるのか。何故倒れていたのか。死んでいるので、人間は沢山いるにも関わらず、私が先に出会い、毎日、私は苦勞しながら治癒をした。私は蘇生させた。まさしく、私は憐れに思い、早く蘇生させたいので、苦勞していたのだが、如何なる理由で、泣こうとする者が泣いていたのか。あまりにも悩ましいことだ。

神でも人間でも、夜も昼も、悩み苦しめられることはこのようにあることか。何者であるのか。このように、苛立たしい話であり、美味しい物も、美味しく食べられる物もあるのに。いつまで貧乏な女、貧しい女は悩み苦しむ、罵りや責める言葉を言うのか。

何故このように泣くのか。私がおまえを蘇生させたのは良くなかったのか。人間であるならば、一言でも感謝するものであるが。何も言うこともしないで、悩み苦しんでいる。いつまで一緒に物も食べずに、このようにしているのか。命を絶ちたくて、死にたくて、恐れはばかることもしないのか。」

このように、罵りの言葉を幾度も、私に投げつけた。そう言われると、私は大いに慌てたものであるから、泣き止んだ。息も塞がったように思った。私はあれこれと思い返した。なるほど、今は私が悪かったのだと気が付いて、なお一層、悔しい気持ちになった。

何ということか、何としたことか。これらはすべて、年少の悪い姉の悪い企みの所業である。神であるのか、人間であるのか。どうにかして私を蘇生させて、昼も夜も二人で苦勞したのであり、なるほど、一言も感謝の言葉を述べずに、毎日泣いていたのだから、まことに私が悪かったことが、心の中で分かったのだが、今はもう、謝る勇気が出ない。

これから、どこかへ行って、自らの身体を投げ棄てれば良いだろうか。悪い姉は尋常ではなく私を妬んだの

だ。私は貧乏な者、尻の切れた奴であり、生きていたからとて、何の良いことがあろうか。私はこのように思った。そのようにしたならば、また、神の如き者たちは私に怒りを抱くであろうと思った。

2641 私は生きたままで、水汲みでも薪取りでもして、少しでも返礼をしよう。その間に、神の如き者たちは、私がどこの村の者であるのか、知ることになるだろう。育ての兄は返礼をしてくれるだろう。私はこのように思った。そこで、すぐさま心を穏やかにした。

2658 若い娘は、私が怒られたことを、まことに気の毒に思ったものであるから、涙とともに私を慰めた。そうすると、今は、その言葉を聞いて私は立ち上がった。神々しい刺繍衣を私は着て、絹の帯を締めた。水滴を何度も用いて手を清め、髪を整えた。

2678 私が火の側に、手をついて這うようにして近づくと、若い娘は、当たり前喜びものであるならばさもあるうが、首の根元も無くなるほど、何度も首を振り、幾度もうなずいた。いつものように、たちこめる靄、その靄の中に私は身体を入れていた。私の周囲は光り輝いている。

2699 若い娘は、このような神、このような貴人が自らを差し置いて、私の方へ顔を向けようとする、如何なる神、如何なる貴人を目にしたというのか。私の手前へ視線を落としている。私に感嘆し、称賛しているようである。

2715 娘は煮炊きを懸命におこなった。宝物の列の手前で、高盛りの御馳走を頭の上に持ち上げ、高盛りの御馳走を私に差し出した。私はそれを受け取り、高くかざし、低くかざして、拝礼した。空腹で倒れてしまいそうに思っていたので、良い食べ物を口にすると、私は心臓の上手から心臓の下手まで、伸びやかな気持ちになった。まことに気分が良くなった。

2736 今は、神の如き者たちは二人とも、まことに安心して、大いに食事をした。私も、まことに安心した。私は思慮の足りない者であるから、畏れもせず、あのように振る舞った。それから、神の如き者たちは、苦勞をしたのだと思い返すと、思いを巡らせると、まことに悔やんだ。

2754 今は毎日暮らしていても、神の如き者たちは、二人とも、どこから来た者であるのか、何故襲われて死んでいったのか、どこの村の者であるのか、などということをして私に尋ねることをしなかった。私は驚きの気持ちを抱いた。同じように、私も、何処の者であるのか、何も言わ

なかった。若い娘が煮炊きをすると、その前に私は立ち上がり、片付けを手伝った。なお一層、娘は私を可愛がった。

娘は絹の布や布切れを取り出して、私の側に置き、刺繍をするように言った。そこで、私は刺繍をすると、以前よりも今の方が、まことに上手である。私が刺繍したものは、幾重もの神雲となって立ち昇った。

これからは、年少の兄、年少の姉と呼ぶことにした。年少の姉は、私が器用である様子を見て、向かいの座で手を高くかざし、低くかざし、鼻を押さえ、口を押えた。まさしく、驚いた様子である。

「まことに驚いた。まだ少女であり、子供であるのに、手先が器用で、刺繍が上手であるのか。驚いたことに、尋常ではないことをするのか。」

姉はこのように言い、まことに驚いているが、宝物の列の手前にいる年少の兄は、少しも、私の方へ振り向くことも、振り返ることもせず、毎日宝器の彫刻、宝物の彫刻をしている。

3.3 ノヤサラのその後

その間に、犬の噂に、鳥の噂に聞いたところ、遠くにいるノヤサラ人は兄弟がおらず、二人の妹がおり、まさに神の如く立派である。男の方も、女の方も、一人残らず、まことに美貌であり、何事も上手である。神の噂が立っている。

トミサンベチ、シヌタブカの神の如き者たちと、同族であるので、年下の娘はシヌタブカの年下の長者の襦袢、その襦袢の半分で育てられた。ノヤサラの女は小鳥の耳飾り、小鳥の首飾り、小袖も鉢巻きも、神宝ばかりで育てられた。まったく人間の美貌ではない女である。神であるかのような、神を凌ぐほどの、良い噂が立っている。

今まさに、ノヤサラ人、神の如き者は、和人との交易をするために、妹たちに言い付けを残して船出した。毎日、和人のところで引き止められて、少し遅れて上陸すると、年下の娘がいない。年上の娘が一人で泣いており、このように言った。

「育ての兄が船出してから、二日、三日ほど、時が流れた頃に、ある日の晩、私が眠ったところ、私の枕元に神である妹が来た。泣きながら、別の金の小袖ばかりを身にまとい、まことに以前よりも美しく、美貌であり、神

2784

2798

2813

2822

2835

2853

2879

2894

の如き姿であり、このように言った。

2913 「さてさて、年少の姉よ、話すからよく聞きなさい。私は霊能力を欠く者、巫術の力を欠く者であり、何の話も知らないのだが、意外にも、天空にいる天の鳥神は、その息子に相応しい相手を探したが、一人も気に入った者がいない。

2932 そこで、人間の国土、その国土の上を調べてみると、まさしく、私のことを心の底から、心の中から、気に入った。そうではあるが、先祖の言葉、残された言葉はあのようであるので、トミサンベチ、シヌタブカの年少の兄の懺悔、その懺悔の半分で私は育てられた。装束とともに育てられた者であるので、どうすることも出来ない。

2956 幼少の頃から、私を見守っていた育ての兄が、交易から戻ってきたならば、親族である人々を残らず招いて会見がおこなわれ、すぐに夫婦の間柄になるだろうと考えた。そこで、まことに気分を悪くして、このように考えた。

2972 「年長の女であっても、このように美貌であり、このように器用である。妹の装束を着させて、姉がシヌタブカの神の如き者の食事の世話をしたら、まさしく、似つかわしい容貌、似つかわしい容姿であるのだ』と考えて、育ての兄が上陸する前に、成し遂げた。私が眠っている間に、私の裸の身体を盗み出し、その懷に私は入った。今はもう、私は結ばれ、深い仲となった。

2996 そうでなければ、どうにかして、再び私の住まいに帰り、年少の兄のところにしか行かないのであるが、私は一人前の女、成長した娘であり、尊い肌も、秘めたる肌も露わにされた。それほどまで、尊い神は私に恋焦がれ、私に惚れたのだ。私は半ばは腹が立ち、半ばは憐れに思うのだ。

3019 なるほど、天の鳥神が言うように、年少の姉、このような神、このような貴人が、それに加えて、私の装束、私の神宝を身にまとして、代わりに年少の兄の食事の世話をするならば、神々も人間も、怒る者は一人もいないであろう。そこで、年少の姉よ、私を憐れに思って、天の鳥神のことも憐れに思って、これらの装束を抱えて、年少の兄に嫁いでほしい。』このように相談された。

3046 「これはまた、私の妹よ、このように振る舞うのか」と私は言い、私は妹をつかまえた。つかまえたと思ったら、私は枕を振り回していた。夢を見たのか、眠っていたのかと思っていたが、私の妹の寝床だけが伸べられていた。そして、妹の装束、妹の神宝が、このような大き

な包みとして、私の枕元に置かれていたのだ。」

娘はそうのように言った。ノヤサラ人は大いに驚き慌てて、トミサンベチへ、このような次第を危急の知らせ、緊急の知らせとして送った。 3072

「結構なことだ。もう、そのことは解決した。それから、怒ったとしても、争いを起こしたとしても、何の実りも無い。淫乱というものは、情欲というものは、神々の間にも、人間の間にもあり、若者の心、若者の気持ちというものは、変わりのないものであろう。私は神慮を伺うつもりだ。天の鳥神も私の妹も、まことに憐れに思うのだ。もう、結ばれているので、泣かせることなく、悲しませることなく、喜んで結婚すると良い。年上の私の妹に私の弟の食事の世話をさせるつもりだ。」 3081

このようにカムイオトブシ、神の如き勇者は良い返事、穏やかな返事をした。暫くすると、「ノヤサラの女、年上の女は、妹の代わりにトミサンベチへ嫁ぐことになる。長者であるから、勇者であるから、頭領であるから、神の心、頭領の振る舞いができるのだ。このような重大な話のときに、我慢して、気持ちを落ち着けて、穏やかな応答をしたのだ」と、誰もが感嘆し、大きな噂になっている。 3111

私は心の中で大いに驚いた。驚いたことに、悪い姉、化け物は、なるほど、乱心した様子であるのか。嘘をつくにしても出鱈目を長々と話し、神々も人間も大いに騙したのであるから、私は驚きの気持ちを抱いたが、このような噂を年少の兄や年少の姉は聞いたのか、そうではないのか。まったく聞いていないかのようなのである。一切この話に触れることなく、いつものように、何も言わない。まことに私は驚いた。 3138

私は思いを巡らせた。如何なる育ちの者がトミサンベチ、シヌタブカの年少の兄であるのか。一度も会うことがなく、私は妬まれたのだ。一人前の女、成長した娘であるのに、祖母の肌も汚され、痛めつけられるにしても、尋常ではないことをされたのだ。驚いたことに、人間であるのか。尊い肌を私は露わにされて、蘇生をされたのだ。人間の振る舞いであるから、結婚するならば、まったく、他の者とは何があっても結婚することはないと私は思った。心の中で私は気合を入れた。 3172

驚いたことに、私が思いを寄せ、恋慕している者が年少の兄であるのだが、どうしたことであろうか。兄は少しも私の方へ振り向くことも、私を見ることもしない。まさしく、私は心細くなった。 3211

第4章 酒宴

4.1 酒宴の招待

- 3226 毎日暮らしていたが、ある日、戸口の背後に良い知らせが届くことはこのようであった。
- 3232 「トミサンベチ、シヌタブカのカムイオトプシ、私が仕える神が私に言い付けたのはこのようなことである。『さてさて、イヨチ人、私の弟よ、話すからよく聞きなさい。もっと早く、僅かな酒を醸して、私の親族、遠くにいる者たちも、近くにいた者たちも残らず招き、良い食事、美味しい酒、その酒によって、親族の会合、穏やかな会合をして、互いに喜びたいと思っていた。』」
- 3260 今まで、養育ばかりに忙しくしており、そうしている間に、今は弟も妹も大きくなった。まことに嬉しく思うので、僅かな酒を醸して、今晚は神に祈ろう。年少のあなたの姉を連れて来て、神に祈り、酒を飲みなさい。』」
- 3277 そのように言われると、年少の兄はその言葉を聞いてすぐに承知した。私たちはまことに喜んだ。「すぐに、年少の姉を連れて酒宴に赴くつもりだ」と兄は言った。年少の姉も、大いに喜んで手を打った。笑いながら、「有難いことに、一族に一人残らず会って、酒を飲むことができるのだ」と言い、まことに喜んだ。知らせを持ってきた者は、良い知らせを持って帰った。
- 3303 その後で、心の中で、私はまことに驚いた。余所者であるのか、他人であるのかと思っていたが、驚いたことに、イヨチ人、年少の兄と年少の姉が私を蘇生させたのだ。なるほど、不思議に思っていたが、そうであるのだから、何を思って、私の出自を聞きもしないのか。そのような理由を承知して、このようにするのか。まったく、不思議に思った。
- 3330 年少の兄と年少の姉は、そうでなくても美しい様子であるのに、酒宴の衣装を身にまとった。ますます、神の如き様子である。私も酒宴の衣装を身にまとった。ますます、私は美しくなり、私の身体は見えなくなったように思われた。イヨチ人、年少の兄に、なお一層、嫁ぐことばかり私は考えていた。
- 3354 トミサンベチ、シヌタブカに私は向かい、一族と会合するのだと、心の中で私は笑いを堪え、自らを憐れに思った。私たちは三人で家の外に出ようとした。年少の姉は大きな小行器を二つ取り出し、一つを私に持たせ、もう一つを自ら持った。年少の兄が先に家の外に出てか

ら、その後で外に出ようと、私は待っていた。

4.2 イヨチ人の病気

- 兄は寝台の上から降りて、上座の上で荒々しく足を踏み鳴らした。鐸の音が響いた。兄が左座へ回ろうとしたときに、よもやまた、そのようなことがあろうとは思わなかったが、突然、左座の真中で、舟の木が倒れるように、兄は床へ倒れた。
- 3396 またとない勇者は、まさしく、苦しみの呻き声、力の無い呻き声を口の中から発し、その声が響いた。年少の姉とともに見ただけではあるが、私たちは大いに慌てた。私は急いで良い小鍋の耳元から水を掛けて清め、良い薬を煮た。その間に、年少の姉は、年少の兄の胸の上で息吹きをした。何度も腹を揉み、何度も腹をさすった。
- 3419 良い薬が私に飲ませると、兄は数多の薬効のある気を飲み込んだ。次第に心臓も落ちついたように思われた。兄は息の声でこのように言った。
- 3430 「何ということか、何としたことか。二度や三度もおこなわれるのが酒宴であろうか。幸いにも、カムイオトプシ、年少の兄が良い酒を醸して、私は大いに喜んだ。私の弟君、国土の神にも、私の兄たちにも会うことができと思っていたが、突然、私の腸が捻じれたのだ。私は勇者の末裔、頭領の末裔であるが、まさしく、腸が捻じれると、息をするところも塞がれたようである。死にそんなほど、半ばは恥ずかしい様子はこのようにあることか。
- 3463 しかし、これぐらいのことであれば、自ら療養することができるよう思われる。さあ、年少の姉よ、酒宴に赴いて、このような次第を述べて、二日か三日ほど歓談してから、少し私に飲みさしを与えてほしい。」
- 3480 兄はこのように言いながら起き上がり、寝台の上へ行き、自ら寝床を調べて寝た。それから、まことに私は安心して、年少の姉の陰にくっつくようにして、家の外へ出た。外の櫓、その櫓の上から、穏やかな風、その風の先に私たちは軽々と持ち上げられた。私たちは何処かへ飛んで行った。年少の姉はこのように言った。
- 3503 「さてさて、神である妹よ、トミサンベチ、シヌタブカに行っても、私の脇のところにくっつくようにしてなさい。誰一人として、おまえの身体を見る者はいないであろうが、それで良い。私の言うことだけを聞きなさい」と姉が言うと、私は承諾の返事をした。

4.3 シヌタブカの神居

- 3520 私たちは飛んでいくと、何処かへ飛んでいくと、人が
噂するトミサンベチ、シヌタブカの頭の折れた岩山が、
天空を揺らすようにそびえている。その山の中腹にま
で、黒い霧がたなびいている。外の櫓、その櫓の上に私
たちは降ろされた。見ると、驚いたことに、金の家、金
の館が重なり建っている。家の周りは美しく飾られてい
る。どこもかしこにも、私は感心し、好ましく思った。
- 3545 館に当たる風がぱたぱたと鳴り、土に当たる風が鳴り
響く。まったく人間の住まいではなく、神の住まいを凌
いでいる。私は好ましく思った。なるほど、私が妬まれ
てあのようにされる筈であると思い、私は目元に涙を浮
かべた。
- 3562 年少の姉も、当たり前に関心するものであるならばさ
もあるうが、まさしく気に入った様子であり、畏まりな
がら、周囲を振り返っている。ひそかに、私たちは互い
に感嘆の声を発した。
- 3577 玄関の納屋へ私たちは入ると、驚いたことに、まさし
く、勇者の気配、頭領の気配が激しい風となって私たち
を後ずさりさせた。金の簾戸が垂れ下がっている様子は
輝いている。年少の姉は手を伸ばし、ゆっくりと簾戸を
上げ、敷居の木を跨いだ。私はその陰にくっついた。
- 3596 土間の上に、手をついて這うようにして、私たちは
入った。見ると、大きな家の横木の下は、隙間なく、神
宝で飾られている。今や、酒宴がおこなわれる様子であ
る。長者ばかり、婦人ばかりが家に集まっている。女た
ちは燃える火に向かい合っている。婦人たち、煮炊きす
る者は、手を忙しく動かしている。団子を煮る者は、団
子の煮炊きをおこない、団子を火から下ろす者は、団子
を火から下ろしている。肉を煮る者は肉の煮炊きをお
こない、火から肉を下ろしている。私はそれを好ましく
思った。

4.4 親族との会見

- 3628 よもやまた、そのようなものを見るときは思わなかつた
が、囲炉裏の手前に、何ということか、何としたこと
か。驚いたことに、私が思い出し、切ない気持ちになっ
ていた、育ての兄がおり、今は男の容姿を備えている。
ますます、今の美しさは素晴らしい。酒宴の衣装を身に
まとっている。神の如き姿をしており、囲炉裏の手前に
座っている。

右座には、小さな霧の小山がある。霧の中心を私は目
で散らして見ると、驚いたことに、人が噂をするカムイ
オトブシ、年少の兄である。今年あたりに、育ての兄に
匹敵するほど、成長したらしいと思われる者である。育て
の兄と、着ているものや、身に付けているものがそっく
りである。

金の小さな兜、その兜の紐を顎の上で締めている。兜
の端で、神々しい顔が昇る日の光のように私に照り返
す。兜の周りの神々しい髪は、神の如く絡み合うかのよ
うであり、肩の上に垂れ下がっている。その上は神光で
輝いている。神授の刀で、腕の下がきらびやかである。
今はまさに、育ての兄と並び立つ神、並び立つ貴人であ
る。

たった今まで、挨拶をしており、笑い言葉を幾度とな
く、口に出している。もう少しで、「育ての兄よ」と言っ
て駆け寄って、その腕の中へ飛び込もうかと思ったが、
私は我慢した。

人が噂をする、トミサンベチの育ての姉がいる。今年
あたりに、年少の姉ほどに成長したらしい者であり、光
の塊のように、酒宴の衣装を身にまとっている。神の如
き様子であり、カムイオトブシ、年少の兄の下座に座っ
ている。

その間に、人が噂する、家の妹がいる。今年あたりに、
少し私に及ばないほど、成長した者であるらしい。大切
に育てられた者、立派に育てられた者であるらしく、金
の小袖、金の刺繍衣を普段着として身にまとっている。
酒宴の衣装を身に付けており、首飾りや耳飾りを身に付
けている。神々しい髪は絹の糸のように、頭の上を覆っ
ている。髪の先端は光り輝いている。その下では、神々
しい顔が日光のように輝いている。まことに、私は感嘆
した。

人が噂をする、私の一族は並大抵ではなく、男も女も、
一人残らず美しい様子である。もう少しで、「姉よ」と、
「妹よ」と言っ、抱きしめたいと私は思ったが、そうす
る訳にもいかないので、心の中で泣きながら、我慢した。

女の頭領たちの中から、何となく奇妙なものが私の目
の側に入ってきた。そこで、私が見ると、よもやまた、
そのようなものを見るときは思わなかつたが、私の悪い
姉、尻の切れた奴がおり、今の美しさは物凄。結婚を
したくて、私を妬み、私に酷いことをしたのである。

私の着物を身にまとい、小鳥の首飾りを首の上に掛け、
神光が輝いている。小鳥の耳飾りで耳元が輝いている。

神光は日暈のようである。顔の上は光っている。神々しい鉢巻を高く締めている。まさしく、私の装束のおかげで、なお一層、顔と容姿が異彩を放っている。

3814 姉は女たちの真中に座っており、まさに驚いた。女であるから、上の方を見ている。私は見ただけではあるが、怖ろしく思い、私の意志で動くことができるならば、もう少しで、姉を捕まえて仕返しをしてやろうと思った。しかし、私の意志で酒宴の座、その座の上で人を殺し、血煙を立てることは出来ないの、私の手の甲の節々を鳴らして我慢した。

3842 年少の姉は、畏まりながら、左座へ手をついて這うようにして進んだ。このような次第で、イヨチ人は突然、腸を悪くして来ることが出来ない、と姉が言うと、兄たちはまことに心配し、危惧する声が周囲に響いた。年少の姉と私は挨拶をした。今は、親族の会見をした。兄たちとも、私は挨拶を交わした。二人の娘も跳ね起きて、「姉よ」と、「妹よ」と言いながら、泣き合い、挨拶を交わした。

3873 悪い姉、尻の切れた奴も、良い女であるかのように、ずる賢くも、良い女と思わせて、年少の姉と挨拶を交わした。まさしく、誰一人として私を見る者はいない。私は驚きの気持ちを抱いた。

3886 それから、大勢の人々が並んで座った。育ての兄の美しい手が持ち上げられ、兄は行器の背後へ座らされた。カムイオトブシ、年少の兄は、酒を取り出した。長い酒宴の座が延べられた。酒宴の座の上手は霞み、酒宴の座の下手は霞んでいる。大きな家の中は、新しい木幣で飾られ、白い靄、濃い靄が満ちている。その中で、神光が明るく輝く。なお一層、誰も私を見ない。

3916 シヌタブカの年少の姉は、酒宴の座を行き来して、酒を注ぐ器を持ち、酒を注いだ。他の人々、婦人たち、踊る者たちの踊り歌う声が響いた。舞う者たちの舞い歌う声が、入り混じって響いた。私はそれを好ましく思った。今こそは、酒宴や神への祈り、遊びなどを私は見た。何とまあ私は感心し嬉しく思うことか。本当に嬉しく思った。

3944 私の悪い姉、尻の切れた奴は、異なる鳥のように、異彩を放つ鳥のように、踊りの先頭になり、舞踊の先頭になった。笑う声、話す声が響いた。驚いたことに、悪い姉はあのように乱心し、狂気に憑りつかれ、酷い嘘をついて、神の傍らで運に恵まれるのか。心の底から遊ぶ様子を私は見て、怒りの気持ちを抱いた。

好ましいことに、シヌタブカの年少の姉は、妹を可愛がり、大切にしている様子を見て、私はまことに感心し、羨ましく思った。悪い姉が私を虐め、私を傷つけたことを思い出すと、私は自らの陰へ向きを変えて、清い涙を何度も流し、自らを憐れんだ。今は、男たちも、遠くの神、近くの神に杯を捧げた。天空にまで、酒も木幣も捧げた。私は安心した。それから、先祖供養も終わり、私は安心した。

それから、またとない酒、神の酒が酌み交わされた。酒宴の座の上で、長者たち、頭領たちが次々と立ち上がった。男の踏舞が幾度となく繰り返され、酒宴の歌声は帰天する神のように響いた。その背後で、婦人たちが踊った。酒宴の座の上で、頭領たち、長者たちは拍子をとった。合いの手を入れる声、気合いの声が入り、私はそれを好ましく思った。

何ということか、何としたことか。イヨチ人、年少の兄が病気になるなかったならば、この座に加わって楽しみ、喜ぶであろうが、悪い病気に突然、罹ってしまった。それから、兄は来られずに、貧乏であり、下らない者である私が一人で、良い宴席に加わっているのだ。良い遊びを見て楽しみ、喜んでいることを思うと、まことに、年少の兄を私は羨れに思い、切なくなった。

4.5 シヌタブカ人との出会い

年少の姉はまことに喜び、踊りや歌に加わると、その脇に私はくっついた。私は思案に暮れた。如何なる生まれの者、如何なる育ちの者がトミサンベチ、シヌタブカの年少の兄であるのか。私が妬まれることは尋常ではなく、何処にいるのか、まったく、それらしい者も私は見なかった。

そこで、畏まりながら、宝列の手前へ目を向けて見ると、金の寝台、仕切られた寝台が伸びている。寝台の上に濃い靄、小さな靄の小山がある。靄の中心を幾度となく、私は目で散らした。そのようにしたが、幾度となく繰り返しても、人間の姿を見定めることができない。長い間、そのようにしていると、靄の中で、私の目の前がさっと暗くなった。

驚いたことに、人が噂をする年少の兄である。もっと成長した人のことを言っているのだと思っていたが、今年あたりにイヨチ人、年少の兄に少し及ばないほど、成長したらしい少年である。金の小袖の袖口にも、裾に

も、幅広の平金が取り付けられている。肩の上から垂れ下がった木鈴が、着物の真中で切り揃えられている。着物の真中から垂れ下がった木鈴が、着物の裾まで連なっている。

4124 留め金の付いた帯を締めている。黄金の中から取り出されたような、神授の刀を帯に差している。薄造りの兜、その兜の上には連なった木鈴、束になった鎖の環が取り付けられており、その兜の紐を締めている。兜の端で、神々しい顔が昇る日の光のように、私に照り返す。勇者であるらしく、勇者の容貌で顔色が異彩を放っている。

4145 自身でも神に祈ったらしく、大きな杯、金の杯を手を持っている。酒宴の座の上で、頭領たち、婦人たちが楽しんで遊ぶ様子を見て、口元に笑みを浮かべている。酒宴の座へ目を向けて、まこと嬉しく思っているようである。

4161 私は驚きの気持ちを抱いた。なるほど、私は妬まれて酷い仕打ちを受けたのだが、人間の姿であると言っているのだと思っていたが、このような者が人間であり、土を踏む者であろうか。あまりに美しい様子であるので、まさに私は驚いた。私は隅々まで眺め回した。何があるとも、イヨチ人、年少の兄以外の人に嫁ぐことはしないと、私は思っていた。

4186 よもやまた、そのように言われるとは思わなかったが、宝列の手前で、若々しい声が響いた。声が美しく響くことはこのようであった。

4195 「これはこれは、このような様子、このような有様を我は不思議に思う。何者かが、イヨチの女、年少の姉の脇に、いつもくっついて、先ほどからまさしく、目を見開いて、隅々まで私を眺め回して、目をびくびくさせている。おまえが何者であろうとも、おまえの目の中を見れば、人間であろうと思われる。おまえが何者であろうとも、おまえに飲みさしを与えたい。ここへ来て、我の飲みさしを受け取ってほしい。」

4222 兄がこのような言ふと、私は聞いただけではあるが、驚きの気持ちを抱いた。驚いたことに、別のところを見ていたかのようにあったのに、どうして私を見ていたのだと、私は悔しい気持ちを抱いた。酒宴の座の上で、女たち、大勢の人々は大いに慌てたものであるから、一斉に、イヨチの女、年少の姉の方へ振り向いた。姉の周囲を眺め回したが、まったく一人も、少しも私を見ることはなかった。

年少の姉は私の耳元に口を寄せてささやきの声を発し、このように言った。「さあ早く、進み出て、年少の兄の良い飲みさしを受け取って飲みなさい。おまえこそが、年少の兄の最初の飲みさしを受け取る者であるのだが、まさに、神の取り計らいである。まだ、一人の女にも飲みさしが与えられず、最初の杯をおまえが受け取るのだ。早く進み出て、杯を受け取りなさい」と私を励ました。

そこで、私は人々の間を、手をついて這うようにして、畏まりながら進んで行き、寝台の下で頭を下げた。私は髪を裾を床に着けた。神の如き者は大きな杯を私に差し出した。杯の下で私は頭を下げ、杯を受け取って高くかざし、低くかざして拝礼した。

私は酒を飲んでみた。今はまさに、酒と呼ばれるものを私は飲んでみた。何とまあ、味が良いことか。まことに、心臓の上手から、心臓の下手まで、伸びやかな気持ちになった。まことに心が落ち着いた。私は小さな行器に飲みさしを注いだ。私は戻って来ると、再び年少の姉の脇にくっついた。大勢の人々は、まことに不思議に思い、じっくりと年少の姉の方を眺めたが、まったく私を見ることはなかった。

その間に、年少の兄は再び、私だけを呼び寄せて、私に飲みさしを与え、私の小さな行器も一杯になった。私の他には誰も、一度たりとも、飲みさしを与えられることはなかった。女たちの上で、私の悪い姉はまったく不思議そうに、何度も周囲を見回したが、少しも私を見ることはなかった。まことに気分を害した様子であり、顔色を悪くして、このように言った。

「これはまた、どうしたことか。イヨチの女の脇で、何かが目を見開いている。何度も、年少の兄が飲みさしを与えると言うが、いつまで眺めても、まったく何も見えない。私には一度も、年少の兄は飲みさしを与えることはない。その間に、何の姿も見えない者に飲みさしを与え、酒を飲ませることはこのようであるのか。」

私を妬む者ばかり、私を愚弄する者ばかりが集まっているのか。まさか、何らかの悪神が私に取り憑き、私を傷めつけようとするのか。年少の兄は、ただ一人で自身を見せて、飲みさしを与えるのか。私だけが極悪の神の身体を見ることができないのか。私の他に、誰か、その目を見開いている者を見ているのか。

妬は周囲を見渡して、見回して、尋ねたが、聞いているのかいないのか、大勢の人々は聞こえないふりをして

おり、知らないふりをしていた。他の人ばかりが話を
して、騒がしかった。悪い姉はまことに気に病んでいるこ
とが、私にはよく分かった。

4415 「年少の兄が一度でも、私に飲みさしを与えたならば、
極悪の神は自らの影を隠すであろうが、ひょっとして、
年少の兄は極悪の神、その神に騙され、骨抜きにされよ
4428 うとしているのではないか。」と姉が言っても、兄たちは
誰も、少しも耳を傾けようとはしなかった。

4433 私たちは遊びながら、まことに騒がしかった。悪い姉
は、ただ一人で、心を悩ませていた。何とまあ、私は快
い気持ちになったことか。いい気味だ、神の与える罰で
あるのだ。結婚をしようとして、姉は酷く乱心した。そ
して、神々も人間も騙して、良い女であり、立派な婦人
であるかのように思わせた。宴席に加わっても、今はも
はや、落ち着いて遊ぶことができない。惨めなことであ
るから、思い悩んでいるのだと思うと、私は快い気持ち
になった。密かな笑い、密かな嘲りを私は浮かべた。

4.6 イヨチへの帰還

4465 イヨチ人、年少の兄のことが、私はまことに心配に
なった。そこで、年少の姉の着物を引っ張り、ささやき
の声を発し、このように言った。

4474 「さてさて、年少の姉よ、今は私の小さな行器も、一
杯になった。まさしく、美味しい酒も大いに飲み、まこ
とに酔いがまわった。年少の兄は病気になり、病人であ
るのに、たった一人で家に残してきた。それから、酒宴
の遊びも美しい様子であり、まことに私は嬉しく思った
が、その間も、年少の兄のことを私は心配していた。行
器に入れた酒、美味しい酒を私は抱えて、先に帰りたい
と思う。年少の兄を看病するのは悪いことか。」

4505 私がこう言うと、年少の姉は首の根元も無くなるほど、
何度も首を振り、幾度も頷いた。姉はささやき声でこの
ように言った。

4514 「私の妹よ、婦人であるから、婦人の振る舞い、良い
心を持っているのだな。私も喜んで遊んでいても、その
間に、私の弟君のことがまことに心配であり、落ち着く
ことができなかった。そうであったが、幸いなことに、
おまえが考えていることは、まさに良いことである。ま
ことに感謝する。さあ早く行きなさい。そうしてくれたら、
少しだけ心配することが無くなり、落ち着くことが
できる。二日か三日ほど、私は歓談して、それから帰ろ

うと思う。」

姉がこのように言うと、私は喜んで、私の小さな行器 4546
を抱えて外に出た。外にある櫓、その櫓の上から、私は
天空へ飛び上がった。穏やかな風、その風の先端に私は
軽々と持ち上げられた。私は進んで行き、イヨチの館に
到着した。外にある櫓、その櫓の上に私は降ろされた。
家の側の上で、私の懐の宝物が鳴り響いた。

まさしく、私は嬉しくなった。美味しい酒を大いに飲 4569
んだので、酒というもので、私の心は陶然としている。
私は家に入った。家の中は宝物の光、神宝の光によっ
て、陽光が降り注ぐかのように、明るく輝いている。私
は囲炉裏の手前に、小さな行器を立てて置いた。それか
ら、灰に埋もれた火、その火を掘り出した。家の中は明
るく輝いた。

それから、私は上座へ行き、美しい折敷と美しい杯を 4591
重ねて取り出した。囲炉裏の手前にそれを置いた。それ
から、左座へ私は座った。今は、年少の兄と二人きりで
ある。人目をばかることもないのであるから、私は心
の底から、密かな笑みを浮かべた。私は嬉しくなった。

しばらくそうしてから、宝列の手前へ私は顔を上げ、 4612
私の喉が響いた。私が言うことはこのようであった。

「年少の兄よ、病気の具合はどのようなのであるのか。少し 4620
は良くなったのか。このように、私は酒宴に赴き、酒宴
の様子を見て、まことに嬉しくなった。私は嬉しくなっ
たのだが、年少の兄のことを思い出し、心配になって、
年少の姉に話し、先に私の飲みさし、美味しい酒を抱え
て、年少の兄の看病をするために帰ってきたのだ。起き
上がって、酒を飲んでください。」

私がこのように言うと、年少の兄は手をついて起き上 4647
がり、身体を伸ばし、身体を縮めた。兄は寝床から出て
きた。まさしく、小袖を着ており、神の如き姿である。
兄は右座の火の側へ出てきた。そこへ座ると、口元に笑
みを浮かべた。

「今は、すっかり回復し、元気になり、よく眠っていた 4663
が、私の妹が帰ってきたことに気付かなかった。有難く
酒を飲もう。」と兄は言い、まさしく喜び、私に感謝し
た。私は酒を注いだ。兄は神に祈り、酒を飲んだ。「ま
ことに酒の神は味が良い」と言いながら、舌鼓を打った。
私に飲みさしをあげさせなかった。私たちは歓談し、互
いに喜んだ。

4.7 失恋

- 4687 私は思案に暮れた。何ということか、何としたことか。私は成長した娘、一人前の女であり、若い心で思い悩んだ。長い間、年少の兄のことばかりを考えていたのだ。いつまで、このように思い悩んでいるのか。いっそのこと、良くない結果であろうとも、幸いなことに、今晚は二人きりである。そして、「兄に話して、悪いことでも、良いことでも聞いて、気持ちを落ち着かせるのが良い」と私は思い、強い気持ちを抱いた。
- 4719 声を詰まらせながら、言葉を詰まらせながら、私が言うことはこのようであった。
- 4725 「さてさて、年少の兄よ、私が話すからよく聞いてほしいのだ。如何なる余所者、如何なる他人が私を蘇生させたのかと思っていたが、イヨチ人、年少の兄と年少の姉であったのだ。
- 4741 何ということか、何としたことか。遅かれ早かれ、穏やかな会見、良い会見を私たちはするものと思っていたが、その途中で、私の悪い姉が私を妬み、殺されるにしても並大抵ではないことをされた。祖母の肌も、母の肌も汚された。傷めつけられるにしても、並大抵ではないことをされたのだが、年少の兄が先に私に出会い、あのよう、私を蘇生させたのであるから、心の中から、心の底から感謝してもしきれない。
- 4773 若者の思い、若者の気持ちは、まさしく、このようなことであるのだ。よもやまた、そのような気持ちになるとは思わなかったが、私は年少の兄のことばかり考えている。年少の兄のおかげで、私は生きているのだ。そこで、何があろうとも、私は年少の兄に嫁いで、食事の世話をしたい。トミサンベチ、シヌタブカで、私が妬まれる原因となった、年少の兄にも私は会った。私は飲みさしを何度か与えられ、それを飲んだのであるが、少しも心惹かれることはなかった。
- 4805 イヨチ人、年少の兄のことばかり考えているのだ。兄はどう思っているのか。年少の兄よ、あなたは拒絶するのか。そうでなければ良いのだが。」
- 4815 このように私が言うと、年少の兄は落ち着いて話を聞いていたが、いきなり顔を上げた。美しい顔であるのに、持ち前の怒りを顔にみなぎらせた。兄は刀の柄を握った。
- 4829 「何と汚らわしく、碌でもないことか。貧乏な女、性悪の女であるから、神々とともに、恐れはばかることも

しないのか。女が成長し、娘が成長し、如何なることが夫を持つということなのか。如何なる女が、先に男に向かって、このような問いかけをするのか。我もこのように、まだまだ、無垢な心を自らの誇りとする者であるのに、貧乏な女、性悪の女が我を侮辱し、軽侮することはこのようにあることか。人が噂をする、淫欲に取り憑かれた者、色欲に取り憑かれた者の振る舞いである。死を望んで、命を絶ちたくて、このような振る舞いをするのか。」

兄はこのように言い、今や、私を斬り殺そうとした。4870
兄は罵りの言葉を、幾度となく、私に浴びせた。私は聞いただけではあるが、どのようにすればよいか分からなくなった。一日中、地面が揺れているかのようである。私は後悔する気持ちを抱いた。

何ということか、何としたことか。イヨチ人、年少の兄は、拒絶するにしても、穏やかに話すのではなく、その言葉は私を突き刺すように、私を斬り倒すように響いた。さらに、如何なるものが、淫欲であり、色欲であるのか。私はそうしたいと思ったから、あのような話をしたのに。何の悪い心も持たずに、あのように話したのに、酷く拒絶されたのであるから、これからは、どのような顔をして、国土の上で生きていくことができるだろうか。

私はこのように考えて、跳ね起きた。泣きながら私が4918
話すことは、このようであった。